

國學院大學學術情報リポジトリ

公開学術講演会 現代宗教は古代宗教と何が違うか? :
宗教進化論再考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001731

平成27年度公開学術講演会

現代宗教は古代宗教と何が違うか？

—宗教進化論再考—

井上 順 孝

一、日本宗教にうかがえる多様性と類似性

このタイトルは、大変大きなものと感じられたかもしれません。どのような趣旨が込められているかを少し敷衍すると、次のようなことになります。

宗教は歴史的に多様な展開をし、今日の状況を生むに至っている。日本の宗教文化という観点からすると、現代宗教の多様性とそこに至るダイナミズムはどう捉えられるか。ダーウィンの進化論が持っていた意味、特に淘汰という概念を再考し、20世紀末から急激に展開した脳科学や認知科学系の研究を参照して、新しい研究視点を提示することを試みる。

なぜこういう大きなテーマに関心を持つようになったかについて、最初に簡単に述べておきます。私は長く現代宗教を対象に研究を続けてきました。近現代の宗教を調べていると、宗教の様相がきわめて多様であることを肌で感じます。例えば、戦後の日本社会を調べただけでもさまざまな現象と変化とが観察できます。そのように多様な展開の背景にある社会変化は何かということを考えながら、個々の教団や関係する人たちの調査を行ってきました。けれども、そうした多様性が生じる理由とか社会的条件、文化的条件というものを抽出するだけだと、何が宗教現象なのか、宗教現象はほかの社会現象や文化現象と一体何が違うのか、といった根本的なところになかなか辿り着かないということを感じ始めました。そこで最近急速に展開した学問領域の

助けを得て、少し冒険を試みることにしたのです。

現代日本の宗教の多様さを少し確認しておきます。神社は宗教法人になっているのが約8万社という数の多さは別としても、その系統を調べると稲荷社、八幡社、天神社などと多様に分かれます。歴史的にも千数百年の歴史を持つものから、設立されて1世紀に満たないものまでさまざまです。

仏教宗派も大きくは13宗ですが、さらに細かく分かれます。例えば浄土真宗であれば、浄土真宗本願寺派（いわゆる「お西さん」）、真宗大谷派（いわゆる「お東さん」）、真宗高田派、真宗興正寺派、真宗佛光寺派、真宗三門徒派、真宗出雲路派、真宗誠照寺派、真宗浄興寺派などです。この派のレベルで数えると150以上になります。日本が近代化を迎える以前から社会に定着していたこうした宗教以外に、近代以降到来した多くの宗教があります。キリスト教はよく知られていて、4,000以上の教会があります。最近ではイスラム教のモスクも増え、2015年時点で90を超えられています。あまり知られていませんが、バハイ教というような宗教もあります。

そうした中にとりわけ多様な活動の形態が見られるのが、私が専門にしてきた新宗教と総称されるものです。その一部を関係図として示しました（図1参照）。我々が1996年に刊行した『新宗教教団・人物事典』⁽¹⁾には300以上の教団が収録されています。これらの教団のいくつかは私自身で調査しています。記憶にあるだけでも80教団以上を訪問し、50人近い教祖、教主、リーダーに面談しました。それぞれは特徴ある教え、実践方法、儀礼などをもっていることが分かりました。

こうした多様性の一方で、これらの宗教にうかがえる観念や、儀礼、実践方法といったものは、実は古くからみられるものが大半です。日本の宗教においては、アニミズム的な思考、占いなどは、非常に古くからあります。占いの仕方は多様であっても、占いによって未来を知ろうとしたり、神意をうかがおうとしたりということは、ほぼ共通しています。個人の占いの他、家族や共同体についての占いもあります。初詣の際に多くの人がひくおみくじも占いの一種に含められます。

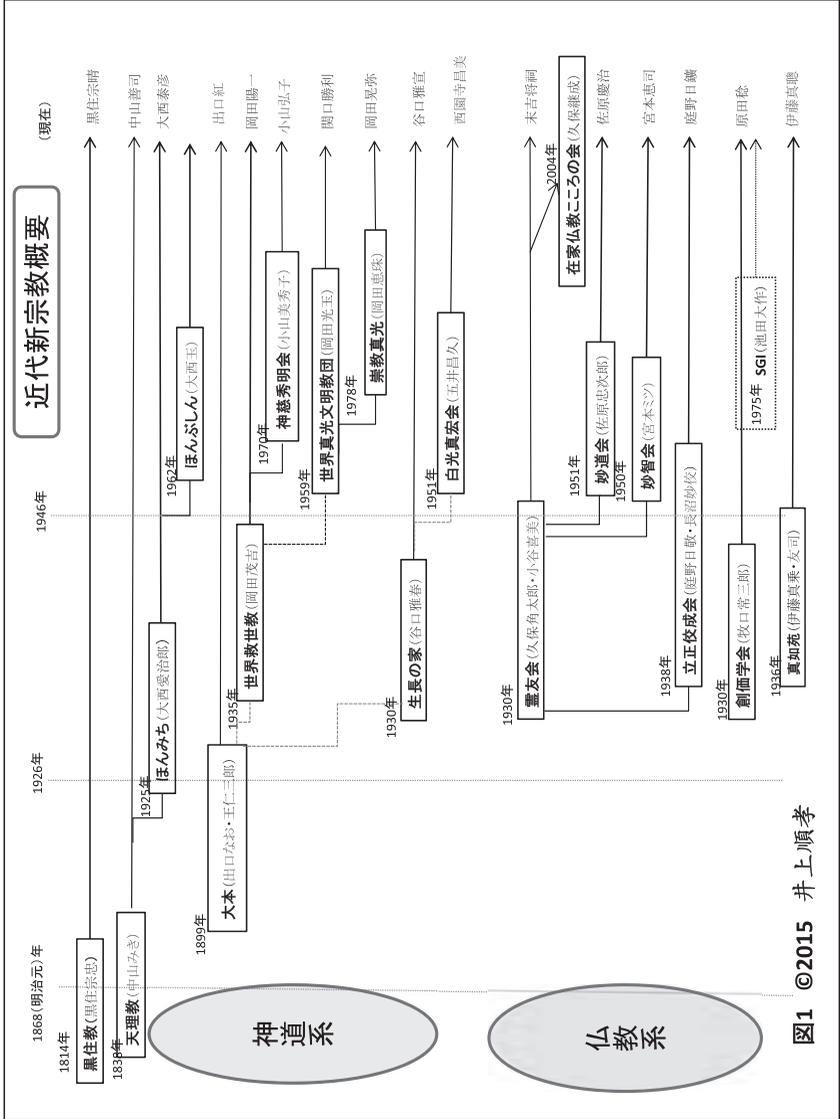


図1 ©2015 井上順孝

図1 近代宗教関係図

それから除災招福、つまり災いを避け福を招くという祈願の仕方も古くからのものです。神や仏や、あるいは祖霊、精霊といったものにも祈ります。日本宗教の特徴の一つには先祖供養、祖霊祭祀というものが挙げられます。先祖との関係を重視するということが現代に至るまで日本に長く見られません。

このように、宗教が多様である一方で、同じような観念とか、行動様式などが継承されているということは、別に日本に限られたことではありません。世界中で観察されることです。占いにしてもそうです。占いは世界各地の宗教に見られます。そして古い形態が今でも続いている場合と、古代だけあったものももちろんあります。例えば、今は古代ギリシアにはアストラガルスという占いがありました。羊の足のかかとの下の膨らみのある骨を使ってやる占いとされています。今でもモンゴルではこれに似た占いがあるようです。アストラガルスは動物の骨を用いた占いですが、動物の骨を用いた占いという括り方をすると、東アジアでは亀卜というものがあります。日本ですと、鹿の骨を用いた太占というのがあるということは知られております。東アジアにはそのほか風水とか、家相とか、人相とか、姓名判断など多様な占いがあります。

現代社会では、非常に多様化した宗教現象が観察されますが、その一つ一つは古くから継続する要素というものが大半です。古代から現代に至るまで、一つの宗教が分化していったり、活動が多様化していく様相は、宗教史研究のいろいろな分野で扱われてきています。一つの派なり教団なりの単位でそれらの関係を見ていっても、その複雑はどの宗教においても予想以上のものがあります。『世界の宗教101物語』⁽²⁾という本を編集したとき、きわめて大まかな宗教の展開の見取り図を作成してみました。細かく調べていくと、とても図示などできないと感じました。

ときどき宗教の講義を受けている学生から、宗教の真理は一つであるはずなのに、どうしてこんなに多くの宗教があるのかという類の質問を受けることがあります。そもそも宗教の真理は一つという前提が問題なのですが、そ

ここに立ち入らずとも、ある宗教が時間の経過、地理的拡大に伴って変化するのは当たり前ではないかと説明します。ある地域から他の地域へと広がっていくと、その宗教を説明するための言語が多様化します。受け入れる人たちの生活習慣、彼らが置かれた自然環境や社会環境も多様です。それぞれの時代、それぞれの地域のそれぞれの人によって受け入れられた宗教が、教えや実践方法等において違いが生じてくるのは避けがたいことです。

宗教現象の多様性を踏まえつつも、宗教社会学や宗教人類学などは、宗教史の研究とは少し異なる視点も用意しました。多様な現象における共通する要因あるいは構造といったものが何かあるのかといった視点です。代表的なものが機能主義の立場です。古代の神道であっても、現代の神道であっても、あるいは中世や近世の仏教であっても、宗教には集団の統合機能があるといった説が提起されました。あるいは占いや呪術的儀礼などが多くの社会に見出されるので、呪術や宗教には不安を静める機能があるのではないかと、いう考えも出されました。もっとも呪術や宗教には不安を生じさせたり、不安をおおたりする機能もあるという考え方もあります。大村英昭という社会学者は、たたりと静めという二つの方向で宗教の機能を分析しました。

二、宗教進化論の誤解

ここで進化論の話に入っていきます。すでに1世紀半前に提起された進化論を、現代の宗教研究においてなぜもう一度見直さなければならないと考えたかに触れます。宗教の諸現象を理解する上で、デュルケム以来の機能主義的観点からの分析は非常に役立ちます。しかし、どこか宗教史を十分把握できないところがあります。明快に説明できるところだけを説明しておくという傾向になりがちです。他方、個々の宗教史に即した研究というのは、その時代のその現象の説明は深くできるけれども、それが宗教に関わる人間の考えや行動を理解していく試みの総体からすると、果たしてどの部分を研究しているのかという見通しが、なかなか得られにくいところがあります。個別の現象への理解は深まっても、他の宗教現象とどこが異なるのかの見通しが

得にくいということです。

そのような一種のもどかしさを感じているときに、1990年代以降、脳科学とか、認知系の学問、進化生物学、進化心理学等々が急速に進み、非常に興味深い研究成果を出していることに気付きました。これは宗教研究にとっても大変重要な視点を提起していると感じました。ただ、私がおの重要性に本当の意味で気付いたのは、ようやく2000年代になってからです。自分の不勉強をやや後悔していますが、致し方ありません。気付いたときに始めるしかありません。急いで関連の文献を読みあさることにしました。今の段階でどんなヒントを得たかについてこれからお話しします。

その前に、これまでの宗教研究と進化論の問題点について、少しだけ述べておきます。19世紀後半には宗教進化論という考えが注目されました。1859年に出されたダーウィンの『種の起源』がきっかけになっているようです。素朴な仮説としては、進化論はそれ以前もあったわけですが、体系化したのはダーウィンと言っていいでしょう。ダーウィンはビーグル号に乗って大西洋を經由してガラパゴス諸島に行き、インド洋を通過して帰国しました。いろいろな生物の観察をした経験をもとに、進化論という考え方をまとめました。きわめて実証的な研究であって、机の上で観念的につくり上げた進化論ではありません。これは大変重要なことです。

ダーウィンの進化論に接した初期の宗教研究において、その理解は少しずれていたように思われます。少し観念的な要素が加わったようです。とくに当初の宗教進化論において、進化というものを単純なものから複雑なものへ、低次のものから高次のものへと直線的に捉えてしまったという点が問題です。日本の宗教学でも非常に有名なE・B・タイラーという英国の人類学者の宗教進化の図式を見てみます。タイラーは宗教の起源に当たるものとして、アニミズムを考えました。アニミズムがマニズム、フェテシズム、多霊教、多神教と進化して、一神教というキリスト教のようなすぐれた宗教へと展開したという図式を考えました。現在の宗教研究では、むしろこうした考えはなされていません。

宗教が進化したとしても、その過程は到底直線的には描けません。宗教史の展開は実際は非常に複雑なことが分かっています。それに一つの宗教が連綿と続くという見方も再考する必要があります。神道にしても、これは古代から日本に連綿として続く日本独特の宗教というとらえ方が一般的です。国内の研究ではこうした見方が大勢を占めますが、国外の研究では必ずしもそうではありません。ある時期—中世、あるいは近代—に新しくつくられた宗教だという見方もあります。

仏教に関していえば、日本仏教というのは上座仏教と同じ仏教と言えるのか、という疑問が呈せられることがあります。初期仏教の基本的な戒律として、出家したら酒は飲んではいけない（不飲酒戒）、妻帯してはいけない（不淫戒）といったものがあります。しかし、現代日本の僧侶の多くは飲酒し結婚します。こうしたもっとも基本的な戒律を守らない人たちによって担われている仏教が、他のアジア各地の仏教と同じ宗教と言えるのかという疑問です。

あるいは日本では山岳信仰が盛んになり修験道が生まれました。修験道は神道が展開したものと言えるのか、それとも仏教が展開したものと言えるのか、なかなか難しいです。両方がまじり合ったといえば、話は早いですが、どっちの流れかを決めようとする、いろいろ複雑な議論が出てきます。

それから新宗教ですが、最初は教祖のもとに新しい組織を作った宗教という側面に関心が集まりがちで、近代化の過程でできた、それまでになかった宗教という捉え方がありました。しかし私は研究すればするほど、それまでの宗教的伝統との結びつきの深さということに気がつきました。大半の新宗教は神社神道や仏教宗派の教えとか儀礼とか、そういうものを踏襲している。そこで最近ではこれらを近代新宗教と呼ぶようにしています。これらは日本の長い宗教伝統に根ざした部分が多いが、一部に独自の教えや儀礼などを持っている。それが近代の生活形態に合わせて形成されたものという性格が強いとすると、近代新宗教は新しい宗教なのか、それとも伝統的な宗教の改革運動と言っていいのかという問いが起こります。ここではこの議論をするつも

りはなく、こんなにも話が複雑であるということ为例として挙げたわけです。

この複雑な展開、そして、宗教進化論の従来の方とは違う議論をするために、宗教進化論を再考する理由をお話しします。進化論というと、どうしても弱肉強食みたいなイメージを持つ人がいるんですけども、これはもうはっきりとした誤解であると私は言っておきたいと思います。もし、弱肉強食というのであれば、ウイルスに侵される人間というのは、ウイルスより劣っているのでしょうか。そういう単純な話ではないです。もし弱肉強食のように見える局面があったとしても、それはある側面だけの話であって、全体の動きをそのように捉えることはできないだろうということです。また、ダーウィン自身もそのようなことは言っていないです。そこを誤解したのではないか。私はむしろ進化に働く淘汰ということを重視していきたいと思えます。

遺伝子研究が進みますと、人とその他の霊長類との関係も明らかになってきました。(図2参照)これは実はかなり単純化した図なのですが、こういう図を描くと、どうしても人が一番進化していて、ちょっと劣っているのがボ

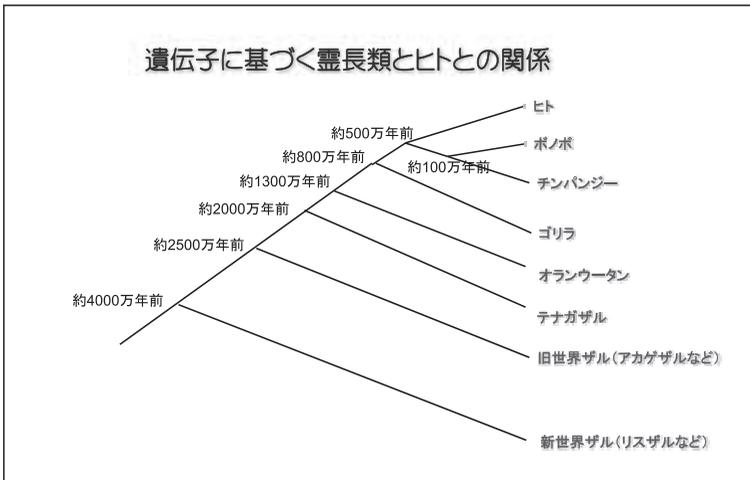


図2

ノボヤチンパンジーという考え方になりがちです。つまり人から離れているほど劣っているという見方を我々はずいするのですが、それぞれの種はそれぞれのやり方で環境に適応して現在の姿になったということです。今生きているということは、それぞれがみんな進化したということです。これは宗教文化を考える上でも非常に大事なことなので、あえてここで申しておきたいと思います。

ダーウィンは『種の起源』の中で進化の図を描いています。(図3参照) いろいろな種の枝分かれについての概略図ですが、これは意図するところを正確に把握する必要があります。現存する種より滅びた種が遥かに多いとされています。なぜ滅びたかというのは、それぞれ淘汰された、環境によって生き延びることができなかった種ということになります。そうすると、どのような形態であれ、生き残ったものは淘汰を経て、現代に至っているということです。この考えというのが、文化現象に適用する場合でも大変役に立つというのが、重要なポイントです。

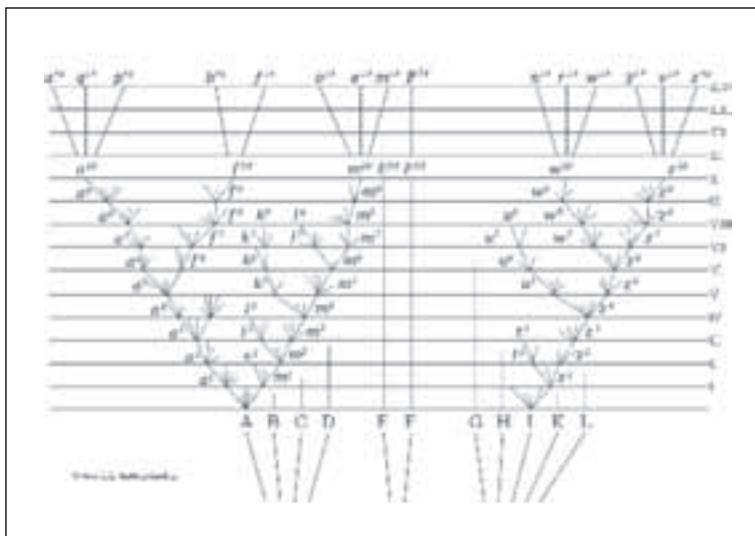


図3 ダーウィン『種の起源』から

三、外的環境と内的環境

やや回り道になりますが、少し別の話をします。進化論は自然淘汰ということ非常に重視するわけですが、宗教のような人間の文化に属する事柄の場合には、生物の進化とは違う要素というか、別の要素が大きく関わってきます。環境というと、一般的には外的な自然環境というのが最初に連想されると思います。けれども、人間にとっての広い意味での環境には、外的環境と内的環境とがあります。外的環境は、まず自然環境、それから社会環境、そして文化的環境があります。

他方、内的環境は近年に注目されるようになったものです。それは人間の脳の中に形成されている信念体系、経験の記憶、感情的反応のパターンといった、ニューロンのネットワークに基づくものです。人間はそれぞれに価値観を持っています。何が大切かは人ごとに違います。特定の価値観を非常に強く意識している人と、それほど強い価値観を意識していない人がいます。いずれにしても、そうした固有の価値観を生み出すニューロンのネットワークが脳内に形成されているわけで、これが何か行動を起こすときに影響を与えます。そういう意味での内的環境です。外的環境が絶えず変わるように、内的環境も変わっていきます。そして外的環境同様、内的環境もその人にとつきまとうことになります。内的環境というのは人間の考え方や行動に影響を与えているのですが、それに気がつくとも現代宗教と古代宗教の間にも予想以上の近さが見えてきます。人間の脳の仕組みはこの数千年で大きな変化はないと考えられるからです。

例えば日本の宗教の特徴としてしばしば挙げられるのが先祖供養、先祖祭祀です。この先祖供養は仏教だけでなく、神道や多くの近代新宗教でも重視されます。仏教の歴史を見ますと、インド仏教では七仏事というのがありました。これは死んでから、初7日から49日まで7日ごとの七仏事です。それが中国に伝わり、百日目と一年目と三年目の仏事が加わり十仏事になりました。日本ではさらに7年、13年、33年の三つの仏事が加わり十三仏事となりました。33年で弔い上げる風習が各地にありましたが、そういうふう

事が次第に増えてきました。死んだ祖先を儀礼を通してより長い期間記憶するような仕組みができました。

一般に神道は死後の世界のことにはあまりかわらないと言われますが、祖霊社を作ったり、祖先のみたまを祭るということもやり、幕末には神葬祭というものも始まりました。

近代新宗教においては、先祖供養は多くの教団において重要な意味をもっています。特に仏教系の新宗教のうち、霊友会系の教団においては、中心的な教義は先祖供養に関するものです。

キリスト教においても、カトリックは本来先祖祭祀とはかかわりを持ちませんが、1960年代に開かれた第二バチカン公会議以来、他宗教との共存を重視する方針が出され、日本では先祖祭祀が許容されることとなりました。バチカンが先祖祭祀をしなさいと言ったわけではないのですが、カトリック以外の教えとも協調するようという方針が、日本においては、先祖供養というものを排斥しないということにつながったわけです。

このように異なった宗教の流れにおいて、いずれも先祖供養、先祖祭祀を重視する、あるいはそれを認めるという動きが生じています。

他方、一つの宗教が多様に展開するという局面もあります。神社神道を例にとりますと、祭る対象が歴史的に多様になります。古代から神話の神々は祭りの対象でした。その他、自然物が祭られる場合もありました。氏神という氏族の祖神も古代から祭られた例があります。三輪山伝説では蛇がご神体とされています。近世から吉田神道の影響を受けて死んだ人を神として祭ることが広く見られるようになりました。さらには、生きた人をも神として祭ることが出てきました。何を神としてまつるかは歴史的に変化しているということです。

あるいはまた、日本のほとんどの宗教が、共同体を重視するという要因から常に影響を受けていることを指摘できます。神道と共同体とのつながりは言うまでもありませんが、仏教は奈良仏教の鎮護国家、日蓮の立正安国という考え、そして近代の日蓮主義における愛国思想など、日本においてもっと

も広い規模の共同体、つまり国家の重視の思想があります。近代新宗教は新しい組織原理を作り、創価学会のように一時期地域社会との軋轢をもたらしただけの教団もありますが、しかし数十年経過していくと、地域共同体を重視する方向へと変わっていくものが大半です。キリスト教は自立した個人の信仰を重視しますが、カトリック教会や一部のプロテスタント教会は、やはり地域共同体とのつながりを重視するスタンスをとるようになります。20年ほど前に日本文化研究所のプロジェクトで日本の宗教系学校の実態調査をしたことがあります。約3分の2はキリスト教系ということが分かりました。⁽³⁾こうしたことは地域共同体を重視するという姿勢がないと、なかなか生じないでしょう。

四、宗教進化に関わる環境

このような現象が起こる理由は、それぞれの宗教の理念によっては説明しにくい。宗教の違いを超えて観察される現象だからです。こうした現象を進化論のアナロジーで考えてみると、面白いことが分かります。生物の進化のパターンに相似 (analogy)、相同 (homology)、収斂 (convergence) という三つがあることが言われています。

相似とは、異なった種の間で、機能的・形態的に同じ役割を果たす形質が、それぞれ別の構造に由来して発達することを言います。例えば、昆虫の翅は外骨格の腹部背板が伸張したものです。鳥類の翼は脊椎動物の前足が変形したものです。しかしともに飛ぶという同じ機能を有しています。

相同とは、外見は異なっても、ある形態や遺伝子が共通の祖先に由来することです。例えば、コウモリの翼とヒトの腕は、ともに祖先の前肢から生じたものです。

収斂は類縁関係の遠い生物間で、それぞれが環境に適応していった結果、似通った姿、器官を持つに至ったことを言います。例えば哺乳類のクジラは流線形の殻ですが、これは魚と同じような形です。これは水の中で生活する上で適した形になるということです。

進化の過程で環境に応じてこういう3つの興味深い進化のタイプが指摘されていますが、先ほどの先祖供養の話が相似、神の展開が相同、それから日本の宗教で共同体優先へとシフトするというのが収斂に対応しているとは見なせないでしょうか。そうぴったりとはいきませんが、アナロジーとして、ある程度参考にできそうです。むろん生物進化の議論を直ちに宗教のような社会的・文化的現象に適用するのは冒険であるのは言うまでもありませんが、恣意的な特徴づけをするよりはモデルとしては活用の可能性が高いと考えます。

恣意的な特徴づけとは、例えば、日本文化の着せかえ人形説といった考えです。これを言う人はもうあまりいなくなりましたが、時代ごとに変わったように見えるけれども、一皮むけば日本文化の本質は変わらないという説です。着せかえ人形説よりは少しダイナミックですが、基層文化説というのがあります。日本には基層になる文化というのがあって、その上に新しいものが積み重なって、基層は古代から現代に至るまで変わらないという考えです。その基層なるものは、日本独特のものと考えられているのでしょうか。それなら他との比較が必要です。日本だけ基層文化を持っているというのも変な話です。また何が基層でしょうか。いくつか提起されているものがありますが、本当にそうかどうか、基本的には確かめられていないと思います。適当にそれに合う材料を持ってきたのではないかと感じます。というのも宗教史を丹念に検討していくと、そんな簡単な展開過程ではないことが見えてくるからです。基層文化は見出される可能性はありますが、いくつかをあらかじめ想定すべきものではないと考えます。こうした恣意的な特徴づけより、進化のダイナミズムを参考にする方が、宗教文化の展開をめぐる議論ははるかにダイナミックになります。

我々人間は生物であり、生物の働きのメカニズムや行動といったものを支配する法則は、ミクロからマクロまで、かなり似ているところがあります。例えば外敵に対する細胞レベルでの働きと人間の行動というのは結構似ています。自分たちの集団にとっての外敵を攻撃したり排除したりするといった

考えや行動ですが、これはかなりの部分に免疫機構になぞられます。あるいは教団で信者が急速に増えるとき、単位となる支部組織などを分割することがよくあります。創価学会や立正佼成会などでよく見られました。これを細胞分裂というふうに比喩的に言ったりしますが、これなどまさに本当の細胞の分裂の比喩をそのまま使っているわけです。細胞が増殖するときには、まず核の部分が分かれます。宗教組織の支部が信者の増加で分割されるときにも、大事な情報を共有しつつ分かれ、信者もその上で2つの組織へそれぞれ分かれていきます。つまり支部が分かれるときは、大事なもの、すなわち教典や日々の儀礼、活動方針などは、どちらにも共有されるようにして分かれます。細胞が分裂するとき、まず核が二つに分かれて、DNAの情報を共有して、細胞全体が分かれていくというのと非常に似ているわけです。

こういうふうには生物の現象を文化現象と比較するというのは、歴史理論のようなものを理念優先で組み立てるよりは、実際の現象を理解する上で応用度が高いと考えています。生物レベルで観察される変化のプロセスは、人間社会や文化の変化において、なにがしか並行現象を見いだせるのではないかという前提です。

そこでこのような議論を、先ほど述べた最近の脳科学とか、認知科学で行われている議論につなげていくと、どんな新しい発想が得られるかです。具体的に関連する研究者の名前をややランダムに少しだけ挙げると、リチャード・ドーキンス、アントニオ・ダマシオ、クリストフ・コホ、ジャスティン・バレット、ウィヤラヌル・ラマチャンドラン、ダニエル・デネット、ジェシー・ベリングなどです。彼らの著作は、今は次々と翻訳されています。⁽⁴⁾ 広い分野で注目されている証拠だと思います。多くの人文系、社会学系の分野に影響を与えつつあると考えています。彼らの研究で指摘されていることを、宗教研究に取り込もうとしている研究者は、日本ではまだあまり多くありませんけれども、遠からずその重要性が広く認識されるだろうと考えています。

では実際にどういう方法を考えていったらいいのでしょうか。ここからが

新しい問題提起になります。宗教史研究は、日本の宗教史だけでも非常に多様な現象があることを見出しています。日本宗教学会という日本でもっとも古く、また会員数の多い宗教研究の学会があります。2000人ぐらいの会員がいるのですが、年一度開かれる学術大会の発表内容はきわめて多岐にわたります。発表の前に、理事会でこの発表を認めるかどうかという会議を開くのですが、その会議のときも、タイトルの漢字が読めなかったり、これは何のことだろうかと多くの理事が首をかしげるような発表があります。つまり、学会の理事メンバーでさえ、把握できないような研究内容がいくつもあるということです。それを考えると、宗教史を総合的に理解するなどというのは、個々の研究者はまず無理な話ということは歴然としています。

実際にはたいていの研究者は、一つの時代、あるいはテーマに即して、こつこつと研究を重ね、そこで新しい知見が得られるように努力するという方法をとっています。これは宗教史研究の一つの王道と言えるでしょう。

ところが宗教研究を続けていると、なぜ宗教というものが起こったのかとか、なぜ神といった概念をほとんどの民族がもっているのか、これだけ科学が発達しても、守護霊がこう語ったみたいな話を信じる人がいるのはどうしてだろうかという類の議論が数々起こってきます。宗教と呪術の境目もどう考えていったらいいか分からなくなります。こういう問いなり疑問なりに対しては、個々の宗教史を積み重ねているだけでは、なかなか研究の道筋が見えにくくなります。

五、ミーム複合体という観点

そこで思い当たったことが一つありました。たまたま私は現代宗教を専門的に研究していたので、現代から出発するという方法もありうるのではないかということです。そうした発想を得るに当たって、いくつかヒントをもらった最近の研究があります。その一つがユニバーサル・ダーウィニズム⁽⁵⁾の立場をとるドーキンスが提起したミーム複合体という考えです。ミームというのは、とりあえずは文化的遺伝子のようなものと考えておけばいいかと

思います。ドーキンスはミームプールという言葉も使っていますが、いろいろな観念とか行動形態のモデルになる文化的遺伝子のようなものが、それぞれの文化の中には備わっていて、その中の幾つかの組み合わせとして、個々の文化があらわれていくという考え方と言っていていいでしょう。

この考えをうまく宗教現象に適用できるかどうかについては、不確かなところがあります。ドーキンスは生物学者ですから、宗教の知識についてはある程度限られています。とくに東洋の宗教についてはあまり詳しくない可能性があります。ただキリスト教に対しては、彼自身が十代で信仰を捨てたということが関係しているのですが、非常に厳しい批判的言説を繰り返しています。それゆえドーキンスや彼の説の信奉者とキリスト教原理主義者との間で激しい議論が続いています。

ここでドーキンスの宗教に関する知識の深浅を議論しても仕方ないと考えています。むしろ宗教研究者の側が、宗教史に関する多くの研究を参考にしながら、ドーキンスの考えが果たしてどの程度宗教現象に適用可能かどうか、を議論していく方が実りあると考えています。仮に宗教がミーム複合体であるとして、日本宗教に関わるミームとして何があるかと考えるなら、すぐさま「カミ」「靈魂」「祖霊」「愛国心」「和の精神」「上意下達」「崇り」「ご利益」「輪廻」「靈界」など無数のものを想定することができます。その組み合わせによって、ある新宗教が生まれたり、シャーマニズムと呼ばれる現象が起きたり、地域の習俗が継承されたりということが起こると考えると、どのような議論が展開するのでしょうか。

ここで、単に多くのミームがあるというだけではなくて、淘汰という概念を組み込むと、現代社会において、大なり小なり影響力を持っているミームは、歴史的にそれなりの社会的、文化的淘汰を経ているのではないかという考えになります。ミームという考え方が、例えば基層文化論、着せ替え人形説のような文化論とどう違うかということ、ある要素を日本文化の基本的要素というふうに最初から設定しないということです。淘汰の結果、人間にとって著しく不利になるようなミーム複合体はなくなり、人間にとって存続する

意味があるものが残るということです。これはいいミーム複合体、悪いミーム複合体という価値観を込めた評価ではありません。生き延びられるミーム複合体か、生き延びられないミーム複合体かということです。

ここですでにドーキンスとは少し宗教の評価が異なることになります。ドーキンスはキリスト教、とくにキリスト教原理主義を手厳しく批判しますが、それらが米国やヨーロッパ社会で現在でも一定の勢力をもっているということは、存続する力をもったミーム複合体ということになります。

ここまでミームという表現をしてきましたけれども、何がミームかというのは、これまでのミーム概念に関する議論で非常に厄介な話であることが分かっています。遺伝子に関わる話だと、DNA というモノを手がかりにできます。ある DNA がどう伝えられ、どう分布しているかなど、実際には多大な困難が伴うことがあるにしても、調べる手段ははっきりしています。

しかし、ミームの場合、DNA に当たるような単位のレベルが確定できません。それゆえミームは文化の議論には役に立たない概念であるとして、早くから放棄した人もいます。こういう大きな問題点があることは確かです。ただ一つのアナロジーとして使った場合には、宗教文化の多様性と共通性、広がりやすい宗教とそうでない宗教といった議論などに際しては、かなり参考になるのではと思っています。

宗教進化論の再考にとって、生物進化のアナロジーはある程度モデルとして有効でも、それだけでは不十分であることは言うまでもありません。現代日本ではしばしば新しい宗教が形成されましたが、中には何に影響を受けて教えを形成したのか、すぐには分からないような教団もあります。宗教の展開には自然環境や社会環境への適応だけではうまく説明できない非連続な要素が多く介在します。

生物進化の議論においては、生物にとっての社会環境は考慮されますが、文化環境というものは考慮されません。社会環境と文化環境の明確な区別は難しいですが、それは両者が相互に深く影響しあっているからです。ただし、文化環境からの影響は、自然環境や社会環境に比べて、時間的空間的制約を

一挙に超えるという特徴をもっています。時間的な面で言えば、古代の宗教思想が現代人にただちに影響を与えることがあります。聖書や仏典のある箇所から、現代を生きる上での大いなる示唆を得ることがあります。空間的な面で言えば、外国に住む宗教家の思想を知って大いなる感銘を受けることがあります。

では文化環境にもミーム論の発想を援用すると、どのようなことが見えてくるのでしょうか。例えば、聖徳太子は十七条憲法の第一条に「和を以て貴しとなす」と決めました。和を大切にすることとは、宗教のみならず日本人の生活のあらゆる面に顔を出します。仮にこれを「和ミーム」と名づけるとすると、「和ミーム」は日本社会では淘汰に生き延びているというふうにみなすことになります。繰り返しますが、生き延びたということと、いい悪いは別次元の話です。

あるいは、お上の言うことには従いましょうという文化様式。これを仮に「上意下達ミーム」と呼ぶとすると、これもなかなか日本では影響をもってきました。上が言ったことに下はおとなしく従うという考え方です。これはあらゆる組織において下が上に刃向かうことを妨げるように作用する。しかし、日本のどの集団でもそうであったかという、そうではありません。「上意下達ミーム」が生き延びやすい組織なり集団なりになるかは、ほかとのミームの組み合わせによるという考えになります。単独でそれが生き延びやすいかという議論にとどまるわけではありません。

人間は、ミーム複合体としての宗教を利用してきたということになりますが、では、いろいろなミーム複合体がある中で宗教の特徴は何かというと、これは宗教の定義に関わってきます。宗教の定義の話になると收拾がつかなくなるということは、宗教研究者の間ではよく知られています。それでも、今日の議論に関して言えば、便利な指標として用いるのは、しばしば暫定的に宗教の定義として用いられる「人間を超えたものの存在についての観念を含む」という程度の定義でしょう。この点を取り除いてしまうと、宗教と道徳の区別がつきにくくなりますし、教祖が言うことと社長が言うことの区

別がつけづらくなります。人間を超えたもの、それは神とか仏とか靈魂とか、魂とかいろいろなものがあり得ると思うのですが、とにかくそういうものを含んでいるものを宗教と仮に言っておきたいと思います。先祖祭祀も先祖の靈とか魂といった目に見えないものが関わります。観念としてあるだけでなくて、そういう存在を信じているわけです。神社崇敬は神が存在するという信念が大前提になっています。

六、宗教史へのリバースエンジニアリング

ここで現代宗教から古代宗教へと目を向けていくときの方法としてのリバースエンジニアリング的発想の応用という議論をします。なぜ宗教史を考える上で、リバースエンジニアリングという方法に着目したかを簡単に述べます。現代宗教を出発すると考えたときに、さてどんな方法があるのだろうかと考えました。宗教史研究のオーソドックスなやり方は、古い歴史を明らかにし、しだいに新しい歴史へとたどっていきます。ある宗教の起源をまずおさえ、それがどう展開して現代に至っているのか、そういう視点です。そうすると、もっとも手がかりが乏しく、アクセスの難しい古い時代の状況との格闘に多くの時間が費やされ、なかなか現代には至りません。何か別の方法はないかと考えました。そこで参考にならないかと考え付いたのがリバースエンジニアリングという発想です。

このリバースエンジニアリングというのは、工学系では非常に有名な概念です。ある製品として出来上がっているが、その仕組みが分からないものがあつたとして、そのソフトウェアとかハードウェアなどを分解、あるいは解析し、その仕組み、仕様などを明らかにしていこうとすることです。つまり、最初どういう仕組みになっているか分からないものの仕組みを明らかにしていく手法の一つです。

分かりやすくするために、一、二具体例を挙げます。例えば自分たちの国にスパイ機が不時着したとします。このスパイ機がどのような性能を持っているか知りたいときに、これを破壊してしまったら、何もわかりません。そ

の機体を部分的に動かしてみたり、分解してみたりして、いろいろ調べていくと、自分の国の飛行機と同じ程度の性能なのか、あるいは劣っているのか優れているのかが分かってきます。個々の部品の持つ目的が分かったりします。

あるいはもっと身近なモノで言えば、自転車のリバースエンジニアリングを考えてもいいわけです。自転車を初めて見た人が、何でこれは動くのだろうかと気になると、一つ一つの部品を確かめると思うんです。ハンドルは何のためだろうとか、ペダルを踏むとどうなるのだろうかということをやっていく。最終的にこれはサドルに乗ってハンドルを操作しながらペダルを踏むと、人間より速く長く楽に動くためのものだということが了解されていきます。

おそらくスマートフォンなんかをつくっている会社は、他社の製品に対するリバースエンジニアリングは普通にやっていると思われます。それぞれは自分たちの製品の特長的なところは秘密にしています。それを互いにリバースエンジニアリングの手法で解明して、よりよい製品を作ろうとしているのでしょう。

これが文化の研究にどう応用できるかですが、リバースエンジニアリングという概念を知ってから感じたことですが、実は文化研究でもすでに似たようなことがやられているのではないか思うようになりました。日本文化研究をやった2人の有名な研究者がいい例です。

1人はルース・ベネディクトです。『菊と刀』⁽⁶⁾という有名な本がありますが、アメリカ政府が日本のことを知る必要があつてやることになった彼女の研究の成果です。ベネディクトは日本人とアメリカ人の行動形態の違いはどこから生じるのだろうかという問いを持ち、日本の文献を読んでそれは欧米の罪の文化とは異なる恥の文化ではないかと考えました。アメリカからすると、日本人には非常に矛盾した二面性があると感じ、その理由を考察していった、恥の文化ということによって解明できるのではないかと考えたわけです。

もう1人は文化人類学者で有名な中根千枝氏です。日本文化研究所主催の

国際シンポジウムにも一度参加してもらったことがあります。中根氏が提起した有名な概念に「タテ社会」があります。⁽⁷⁾ タテの原理が日本の組織、会社とかいろいろなところに働いていると発見したわけです。日本社会で起こっている特徴的な組織のあり方の理由を探っていったら、タテ社会という、横のつながりより縦を優先する社会だと見ることによって、あらゆる組織の行動原理が分かったということです。

これはやり方としては極めてリバースエンジニアリングに近いと私は感じました。リバースエンジニアリングを文化研究に応用するというやり方が果たしてどれだけ有効かはまだ確たる自信はありません。ただ英語による刊行物を検索してみましたら、リバースエンジニアリングによる宗教文化の研究は、もう着手されていることが分かりました。⁽⁸⁾

リバースエンジニアリングの発想を日本の宗教文化の理解にどう応用できるのかということになります。このときに二つの方向を考えております。一つは、宗教文化自体のリバースエンジニアリングです。それから、もう一つは、脳の中の宗教的信念等のリバースエンジニアリングです。最初のほうは比較的分かりやすいかと思います。脳の中という話はなかなか難しい話で、私もどの程度研究できるのか、強い自信はないのですけれども、検討してみる価値はあると思っております。

七、遺伝的に組み込まれた認知の仕方

なぜそうしたことを考えるようになったかという、脳科学がここ四半世紀くらいに生み出したいろいろな仮説が興味深かったからです。とくに人間が意識することができない認知のメカニズムということの重要性に強い関心を抱きました。宗教を理解する上で知らなければならないことであると確信しました。

認知全般の話はとても手に負えませんので、分かりやすい視覚の話为例にとります。我々が小学生の頃は、目はカメラみたいなものと教わりました。カメラは目の構造をモデルにしてできたのだということを教わった記憶があ

ります。ところが実際人間が物を見ているというのはそんな単純な話ではありません。我々が何か見ているとき、対象を三次元で捉えているように認識しています。近いか遠いかが分かるからです。動きもわかります。しかし、網膜がキャッチしているのは二次元の情報です。そこには奥行き情報はありません。この二次元で得られた情報がどうして三次元に再構成できるのでしょうか。網膜に到達する光の情報を処理するメカニズム一つとっても、脳というのは実は非常に不可思議な働きをしているということが分かってきました。⁽⁹⁾

例えば我々は物の動きをそのまま捉えていると思っていますが、脳の中では、対象が動いているときには、その物が何であるのかということと、どういう軌道を描いて動いているのかということは、別々のルートで処理されていきます。後者の方が早く伝達されます。それらの情報を統合して、最終的に動いているものを見極めます。それが瞬時になされているので、別々の処理系統があるというようなことは自覚できません。イチローがヒットを打つときでも、飛んでくる球がどんな状態であるかよりも早く、その動きを捉えています。どう動いているかを認知することが大事であって、汚れない球か、少し汚れた球かというのは後からわかっても構わない。

これはおそらく人間だけではなくて、動物が命を守るためには、自分の方に飛んでくるものが何であるかということを見きわめるよりは、どんな軌道を描いて飛んでくるかということを知るほうが、命にとっては大事だったからと考えられます。それがたとえミカンであろうとも、あるいは石の塊であろうとも、動きを捉えればよけることができます。柔らかなゴムまりということが後でわかったとしても、よけたことがばかばかしいということにはならない。なぜならば、何であるかを判断しようとして少し遅れて当たってしまい、それが固い石であったら、打ち所が悪いと死ぬかもしれない。リスクを避けるには、動きについての情報が早く伝わった方がいい。まずは生命にとって大事な情報処理の方が優先されるようになったと考えられます。

視覚に関するそのほかの要素、形とか、表面のテクスチャー、色とかはま

た別々のルートで情報伝達されます。色を識別するのは錐体細胞で、これは網膜の真ん中に集中しています。周辺はほとんどない。多くの人は、周りの情景をカラーで認識していると思いますが、実は網膜の周辺では桿体細胞によるモノクロの情報しか届いていません。しかしそうは認識していません。これは自分の脳が知らないうちにいわば編集作業をしているのです。そういうことも分かってきました。つまり、脳は我々が思っている以上に、今までの進化の過程で得られたさまざまな複雑なメカニズムを構築していて、我々は意識できないままそれを使っているということです。

具体的にこのことを了解してもらうために、認知心理学などでよく使われている図を用意しました。(図4参照)この図はすべて直線で校正され、縦と横は直交しています。しかし、どう見ても真ん中が膨らんで見えます。それからこの絵はどこかで見たことがある人がいるかもしれません。(図5参照)二つの平行四辺形は実は全く同じ形です。しかし、どう見ても左のほうが細長く感じられます。疑う人は、後でハサミで二つとも切り取り、形が同じであるということを確認してください。

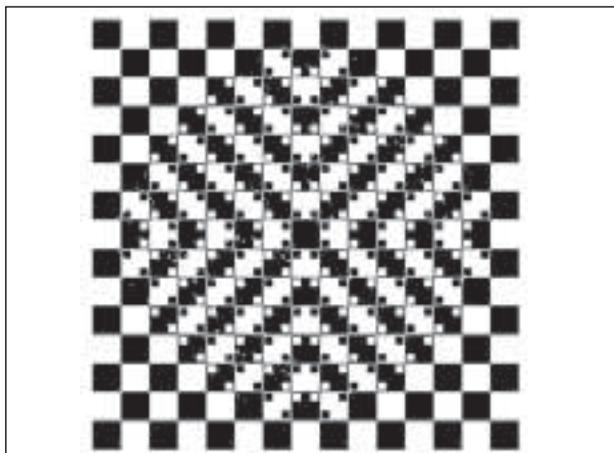


図4 すべて正方形できているが、曲って見える。

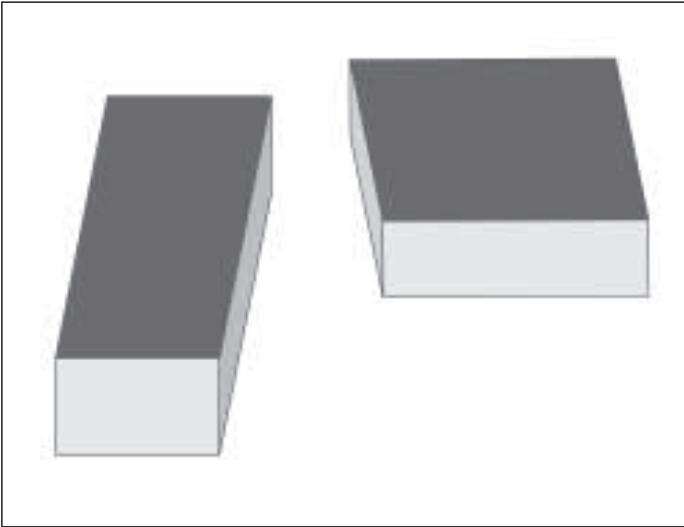


図5 左側の方が縦長に見えてしまう。

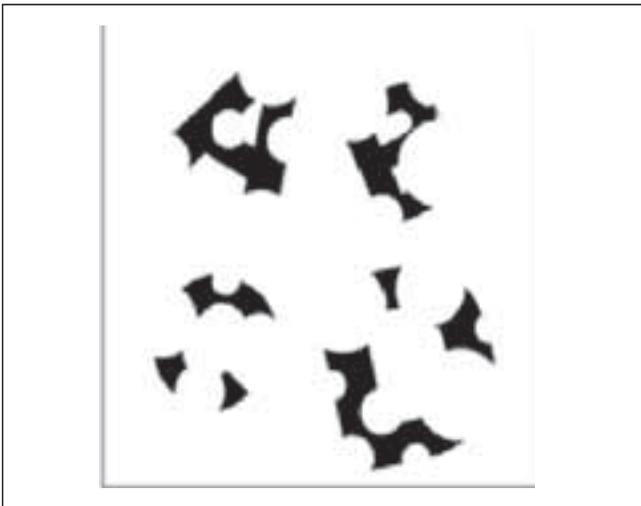


図6 文字が見えるか？

それから次は、何が書いてあるか分かるでしょうか。(図6参照) すぐ分かった人はいい認知力です。でも一部を隠すと、ほとんどの人はアルファ

ベットが隠れているというのが分かると思います。普通は一部が隠れていると分かりにくくなります。しかしこの場合は、一部が隠された方が分かりやすくなります。これは一体どういうことでしょうか。

人間は隠された情報を勝手に補う。この場合は文化的知識が関係しますので、アルファベットを知らない人には隠された情報は補えません。でも、アルファベットを知っていれば、文字が読み取れる。一部が隠されているということが分かっているので、情報を補って読み取るのです。この方法は教わったわけではないのです。自然に身につけている。先ほどの錯視などは、定規で測って直線と分かったので、直線として見ようとしても、そう見ることができません。視覚に関する脳細胞が勝手に作業をして、対象を歪めて認知させているのです。

次の図もどこかで見たことがあるかもしれません。(図7参照) 百八十度回転させると、始め出っ張っている円が凹んで見えるようになります。これは、人間が光は大体上のほうから来るというのを生まれてからずっと経験していることに基づきます。凸凹がある場合、影は下のほうにできる。つま

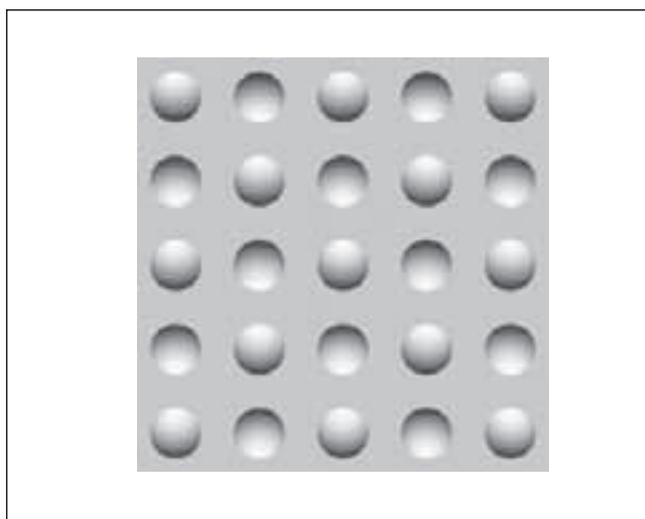


図7 凹凸をどう判断するか

り、太陽というのは水平線より上にあるわけです。太陽が水平線より下にある世界というのは経験していません。そうすると、影のでき方で、光がやってくる方向を判断します。それによって二次元の図像を、出っ張っているか、凹んでいるか、教わらなくても自然に判断します。これは教わっているわけではないので、遺伝的に組み込まれた視覚の認知の特性です。

同様のことが聴力でも言えますし、触覚でも言えます。そういうのが組み合わせられた人間の行動とか、感覚というのはいかに遺伝的なものに左右されているかということです。

さらに文化を絡めた例を出します。(図8参照) この並びで真ん中の文字を言ってもらくと、普通はBと答えます。しかし、別の並びにしたらどうでしょう。真ん中の数はと言ったら、13と答えるでしょう。しかし、もともとの物理的な情報は全く一緒です。つまり、コンテキストによってBとか13とか判断しています。文化的なコンテキストというのはこういうことです。数字や文字の並びを知ることによって、同じ視覚情報を自動的に別のものと判断することができる能力を身につけているということです。

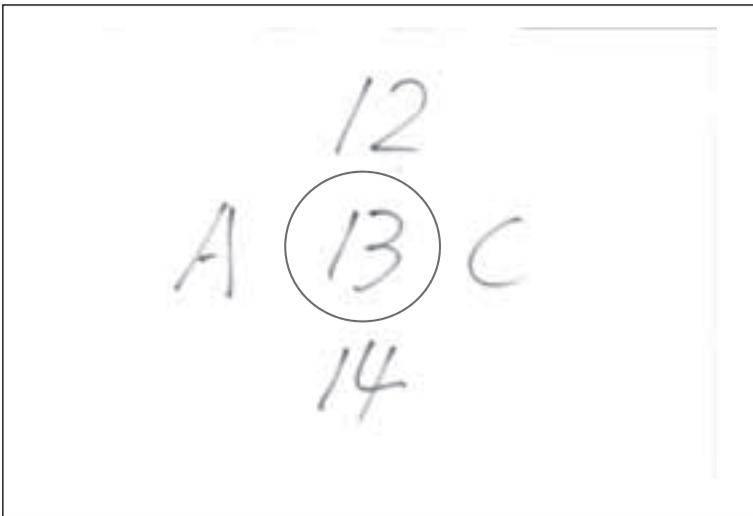


図8 コンテキストで判断する

今述べたことは、五感のうちでも視覚に関するほんの一部の話ではありませんが、ここから宗教研究に関して何を発想するかです。あらゆる知覚について、我々が生まれたとき既に、我々が知らない多くの認知の仕方がインプットされているということです。遺伝的にその人の物の見方、考え方を左右する可能性というのは、かなり具体的に定まっていたりします。ここが宗教を考える上でも非常に大事なことになります。つまり、理性によって良い悪いを判断して、例えば悪いことをやめようとしても、それとは別の力が人間の行動に影響力を及ぼすだけでなく、理性的な判断と思っているそのことにも、遺伝的なものが作用しているかもしれない。遺伝的な要因と文化的な要因の関係については、K・スタノビッチらが用いている二重過程理論（dual process theory）などの理論があります。⁽¹⁰⁾この点を考慮しないと、特にカルト問題などは、なかなか理解できないことがあります。

八、現代宗教と古代宗教にとっての内的環境の違い

少し話を整理しますと、人間は文化的存在ですから、生物としての人間ということに加えて、文化的存在という性格を持ちます。その文化的な要素は、個々人の脳内において、それぞれ個性ある結びつきを形成し、その影響のもとに人は考え、生きているということになります。これだけですと、ごく一般的な説明になりますが、では、現代宗教というのを出発点にしながら、古代宗教までさかのぼって、なぜ人間が宗教のようなものを生み出したかを考えようとするとき、どんな方法がありうるでしょうか。その一つの試みとして今日お話ししたいのは、リバースエンジニアリング的な方法で宗教史を見るという視点です。

私は宗教情報リサーチセンターの研究者と協力しながら、『〈オウム真理教〉を検証する—そのウチとソトの境界線』⁽¹¹⁾という本を2015年に刊行しました。これは刊行時の20年前にあたる1995年3月に地下鉄サリン事件を起こしたオウム真理教を対象にした研究の成果です。オウム真理教問題は、まさに現代宗教の大きなテーマの一つとされています。ここには一体宗教現象に関

わるどんな問題が含まれているのかを、執筆者全員で検討を加えました。

いくつか特徴的なことを挙げてみましょう。麻原彰晃は空中浮揚ができると主張しました。彼をグルと崇め、その指導にはすべて従う多くの若い人たちが中核的信者になりました。熱心な信者たちはサティアンで共同生活をしました。ヨガの修行をして、修行すれば空中浮揚ができると信じた人がいました。麻原は死の恐怖を信者に植えつけましたが、その際、輪廻とか、死後の世界に関する教えを非常に巧みな説法を行いました。麻原はカセットテープ何十巻分に、自分の説法も吹き込んで、信者たちはそれを毎晩聞いて寝るという生活をしておりました。さらに、アニメ、ビデオを自分たちでつくって、布教にも利用しました。そして1994年に松本サリン事件、95年に地下鉄サリン事件を起こしました。

さて、こうした彼らの活動や行為の中に、いくつかのミーム的なものやミーム複合体にあたるものを取り出すことは可能です。空中浮揚というのは、オウム真理教独自の超能力のように言われましたが、修行して特殊な能力が得られるというのは、宗教史には数多く見出される信念です。輪廻の教えなどはむしろインド宗教の根本にある観念です。このように非常に古くからある観念も見られますが、他方で最近になって可能になった布教方法、例えば、アニメ、ビデオを使った布教・教化法も見られます。新旧さまざまな要素がここの中にはあるのですが、オウム真理教がなぜこのように最終的にテロ行為まで行うような団体になったのかについて、リバースエンジニアリングというのをやると、どんな視点が生まれるかということになります。

オウム真理教という新しい教団の活動形態が、どのような宗教史の展開に関わりを持つかを探っていくことは、現代宗教からスタートして古代宗教へと至る一つの方法となります。ただしこれはやはり大変な作業となります。出発点は現代なので、ある程度対象を明確にできますが、どのような進化の過程を探し出していけばいいのか、何がいろいろな進化の過程で起こったのかを、見つけ出さなければなりません。

それに際して、出発点である現代の特徴もある程度見定めておく必要があ

ります。現代とそれ以前の違いに関するこのうち、自然環境、社会環境、そして文化環境といった外的環境については、少なからぬ研究蓄積があります。そこで、ここではとくに最近注目されるようになった内的環境を中心に少し考えてみたいと思います。現代とそれ以前の宗教文化の違いを考える上で、内的環境にも非常に大きな変化が生じている可能性があるからです。

現代社会は、それぞれの人間の脳と脳をつないでいく仕組みが高度に発達しました。脳と脳との関係はむろん今に始まったことではなくて、会話すれば、あるいは動作をしてみせれば、互いの脳同士は情報をやり取りし、コミュニケーションしていることになります。相手がこう動いた、こう話したと認知することは、脳同士のコミュニケーションでもあります。

ところが誰と誰の間でのコミュニケーションが成り立っているかということになると、現代ではその規模が飛躍的に拡大しています。古くからの人間同士のコミュニケーションでは、大体相手がわかってやっていました。けれども、最近のソーシャルネットワーキングシステム (SNS) ですと、誰と誰が同時にコミュニケーションしているのか、どれほどの人数とコミュニケーションしているのかが分からない場合があります。またバーチャルな世界からの情報も得られます。そうした情報は文化の枠を簡単に超えていきます。

日本語によるコミュニケーションではなく、英語によるコミュニケーションを行うと、世界各地のミーム複合体とつながる確率が飛躍的に増大します。きわめて多様で想像すらできないような複雑な脳のつながりが生まれることになります。これは何を生み出すのでしょうか。人間社会にとっていい面にも、悪い面にもそれは作用します。それは進化と善悪とは基本的に関係ないので、避けがたいことです。

たまたま最近目にした、分かりやすい例を挙げます。不愉快になる人が多いと思いますが、現代の情報の発信受信の相互影響をよく示しているのであえて取り上げます。ある女性漫画家が、「他人の金で。そうだ、難民しよう」というタイトルの漫画を描きました。これは難民をあざけるような極めて不快なキャッチコピーです。しかしながら、これもレイシストの戦略として見

るなら、仮想の自集団による仮想の敵への攻撃をおおっている典型例と理解できます。愛国心ミームはこう利用されがちです。団結して敵に向かうという内容のミームはいつでも姿をあらわしますが、問題はそれがどのような別のミームと結びつくかということです。この漫画は現在日本よりもむしろ国外で問題にされております。まさにネットワークを通じて、日本でこんなひどいことをやっている人物がいると批判されています。

このキャッチコピーとともに描かれた漫画は、そのもとになる写真があります。その写真は難民の少女を写したもので、難民を救済しようという趣旨の写真です。それを逆手にとって嘲りの漫画にしている。人の不幸を嘲る際にレイシスト的要素を混在させるという手段は新しいものではありません。しかし、そうした行為が極東の国の一女性によってなされているということが、きわめて短期間にグローバルに認識されるということもまた、現代の特徴です。こちらは外的環境の問題となります。自分の使っている手法のえげつなさは本人も自覚しているようですが、愛国ミームと差別ミームと有名願望ミームが結びつくとういうことになると解釈できます。不快なミーム複合体が無数の脳に情報発信する。これが現代に特徴的なことの一つです。

むすび

結論に持っていきたいと思います。ここで進化ということをもう一回考えます。進化において最も肝要なことはずっと存続できるということです。生物種でも文化のミーム複合体でも、存続できるかどうかが進化にとって決定的な尺度になります。存続できなくなると、そこで終わるわけですから、そこで進化はなくなるという話です。存続している宗教現象は進化の過程にあると言えます。したがって、アニミズムは宗教の初期形態と位置づけて終わらざるは不適切です。多神教は一神教になる以前の段階ととらえるのも不適切です。アニミズムはアニミズムなりに進化しています。多神教も多神教として進化を続けています。今後それがどうなるかわからないけれども、今あるものは進化の途上にあるという理解の仕方になってきます。

しかし重要なことがあります。それは存続しているということと、善か悪かという我々が持っている理性的な価値判断とは別の事柄、異なった次元の話ということです。善か悪かはそのままでは進化における淘汰の基準にはなりそうにありません。悪は滅ぶといいますが、それは願望であって、実際には悪はいくらでも栄えています。むしろ善が厳しい生き方を強いられるという局面の方が目立ちます。ということは、進化は善を目指しているわけではないのかもしれないと考えられます。善悪は人間がつくり上げた価値観ですから、進化はそういうものと基本的に無縁であるとまずは考えたほうがよいように思われます。

しかしながら、これで終わるときわめてベシミスティックな話になります。善悪は淘汰に基本的に関係がないとしても、あることを善とする集団が存続しているとすれば、その価値観は間接的に淘汰に関係しているとみなすことができます。例えば仲間を大事にしましょうという考えを共有する集団が、現に数多く存続しているということは確かです。仲間を大事にすることがいいという考えを伝えていくのは理性的な判断です。これを進化論の枠組みで捉えなおすと、仲間を大事にすることがいいというミームを取り込んだ集団は、存続している例が多いという解釈になるでしょう。

最近の新しい研究成果を宗教研究に応用していくにはどうしたらいいかという点に関しては、今の段階ではこの程度の考えにしか私は至っておりません。リバースエンジニアリングの宗教文化研究への応用がどうすれば可能かについても、具体的な方法はこれから試行錯誤になると思います。ただこれについては欠かせないことがあります。それは対象を前にして、より基本的と思われる事柄への具体的な疑問を見つけることです。なぜ人間は見たことがないものを信じるのだろうか、なぜ無差別のテロが起こるのか、あるいはこの忙しい社会に非常に荘厳な儀式に非常に時間を費やすのはなぜだろうか、いろいろな疑問が沸き起こってきます。宗教を研究する上で欠かせないものを見つけ、それらと取り組むという、ごく普通のアプローチこそリバースエンジニアリングの発想の応用にはもっとも重要です。

無数の宗教史研究の積み重ねがすでにあります。そこで自分の抱いた疑問に対応する宗教史研究の成果を探していくということになります。これは結構大変です。けれども、多くの研究者が国内、国外で研究を蓄積しています。必ずや自分の持った疑問に関係する研究があるはずで、これまでの宗教史研究の王道である時間軸に沿って古い時代から新しい時代へとたどるやり方とは別に、それぞれの時代の出来事を人間の内的環境への影響として捉えながらリバースエンジニアリングをしていくことも必要と考えます。なぜなら先ほど述べたように、我々は自分が考えている以上に、進化の過程で獲得した物の見方、行動の仕方に制約されているからです。

理性に基づく判断を重ねていけば、宗教の将来はきっといい方向に向かうというのは、一つの希望ではあります。けれども、それは何パーセントかの希望に過ぎないのではないかと思います。人間がなかなか逃れられない力とか作用、むしろそれらを明らかにするという方法をもっと追究することで、宗教の理解はいつそう進むとっております。対象の理解が進まなければ、ある価値観からこの方向にもっていかうと考えても、なかなか実効はあがらないのではないと思うからです。

自分でもやや研究途上の話をいたしましたので、あまり説得的でなかったところもあるかとは思いますが、目指すところだけでもご理解いただければと思います。

註

- (1) 井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編。弘文堂刊。なお、同書は、同じ編者による『新宗教事典』（弘文堂、1990年）の資料篇を改訂増補して刊行したもの。
- (2) 井上順孝編、新書館、1997年。
- (3) 日本文化研究所の宗教教育プロジェクトでは、1990年代に日本の宗教系の学校の調査を実施した。その結果は、國學院大學日本文化研究所編『宗教と教育』（弘文堂、1997年）を参照。

- (4) 宗教に言及したものを若干挙げると、次のような書が邦訳されている。以下 () 内は翻訳された年。ヴィラヤヌル・S・ラマチャンドラン『脳の中の幽霊』(角川書店、1999年)、リチャード・ドーキンス『神は妄想である—宗教との決別』(早川書房、2007年)、パスカル・ボイヤール『神はなぜいるのか?』(NTT出版、2008年)、ダニエル・デネット『解明される宗教—進化論的アプローチ』(青土社、2010年)、ジェシー・ベリング『ヒトはなぜ神を信じるのか』(化学同人、2012年)。
- (5) ダーウィンの進化論をもとに、生物進化だけでなく、心理学、経済学、文化研究など多様な分野に応用していこうとする立場のこと。
- (6) Ruth Benedict, *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*, 1946.
- (7) 中根千枝『タテ社会の人間関係』(講談社、1967年)
- (8) 例えば、Aaron C.T. Smith, *Thinking about Religion: Extending the Cognitive Science of Religion*, Palgrave Macmillan, 2014、Ann Taves, “Reverse Engineerign Complex Cultural Concepts: Identifying Building Blocks of “Religion”, ” *Journal of Cognition and Culture*, Volume15, Issue 1-2, 2015.などがある。
- (9) ギブソンのアフォーダンス理論は、人間や動物が光の情報を捉えるときに起こる複雑なメカニズムに着目して生まれたもの。ギブソンのアフォーダンス理論については、J・J・ギブソン『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』(サイエンス社、1986年)を参照。
- (10) 二重過程理論については、キース・E・スタノヴィッチ『心は遺伝子の論理で決まるのか—二重過程モデルでみるヒトの合理性』(みすず書房、2008年)を参照。
- (11) 宗教情報リサーチセンター編、春秋社刊、2015年。